

## ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育

——モスクワの「子どもの家―実験室」に関する報告書

ヴェラ・シュミット

(訳・解題 白坂華菜)

### I 「子どもの家―実験室」を取りまく環境の沿革

教育の問題、とりわけ幼児期の共同体教育への関心は、ここ数年の出来事の中にロシアで格段に高まった。そこで、精神分析に関心を持っている私たちの小さなグループでは、科学的観察の機会だけでなく、精神分析的知見に基づきながら教育の新しい方法を探求する可能性をも提供することになるような子どもの家を設立する、という案を思いついたのである。この目的のために、一軒の邸宅<sup>(1)</sup>が自由に使用しても良いように提供され、また教育人民委員部が資金を拠出したことで、一九二一年八月一九日、公式的にはモスクワ精神神経学研究所所属の「子どもの家―実験室」を開園することができた。この施設の責任者は、ロシア精神分析運動の指導的人物でもあったイエルマコフ教授であった。しかし当時のモスクワでは、精神分析の理論的知識だけでもかろうじて有しているような訓練されたスタッフを見つけるこ

とは、ほとんど不可能であった。それ故私たちは、この施設の特殊な課題に関心を持っており、施設で私たちと協働する過程においてはじめて継続的な訓練を受けることになるような教育者たちを採用するということで、満足しなければならなかったのである。

私たちは三十名の子どもたちを受け入れ、彼らを次のようにして三つのグループに振り分けた。

第一グループ 一歳から一歳半までの子どもたち六名

第二グループ 二歳から四歳までの子どもたち九名

第三グループ 四歳から五歳の子どもたち十五名

子どもたちの両親は、労働者階級や農民階級、さらにはインテリゲンツィアに至るまで、極めて多様な社会的階層に属していた。

施設の科学的活動はまったく平穩に進行していたにもかかわらず、三ヶ月後にはすでに、この活動に関連するあらゆる種類の噂が、町中で広まっていた。たとえば、私たちの施設では恐るべき事態が生じている、といったことや、私たちが観察のために、まだ幼いうちから子どもたちを性的に刺激した、といったこと等々が噂されたのだ。これを受けて、政府当局が調査に乗り出した。小児科医や教育学者、心理学者、そして教育人民委員部の代表者によって構成された調査委員会は、会議や協議会等々を行いながら、数ヶ月にわたり活動した。すると最終的に、彼らの意見は分裂した。すなわち、医師と教育学者は、施設を支持する意を表明し、私たちが行っている活動は有益であり価値がある、と評価した一方で、心理学者は、当施設の活動を教育学的小科学的な観点から極めて痛烈に批判したのである。こ

れを受けて教育人民委員部は、その代表者を通じて、当施設を存続させる意思はこれ以上ない旨を表明したが、その決定の理由として挙げられたのは、この施設の維持費が莫大であるということ、ただそれだけであった。<sup>(2)</sup>

それから間もなくして、精神神経学研究所在が、今度は自分たちの側から、私たちの施設を再度査察するよう命じた——というのもこの研究所は、所長の交代に際し、精神分析に断固として反対する立場をとっていたN教授<sup>(3)</sup>がその長を務めるようになっていたのである。この調査委員会の見解は、感情的な雰囲気強く帯びていて、ことごとく否定的なものであった。公的な会議の席上でN教授は、「子どもの家——実験室」の所長、職員、さらには子どもたちをも侮辱したのである。そしてその後、この精神神経学研究所在は、「子どもの家——実験室」に対する以後の支援の一切を打ち切ったほか、思想的な面において実験室との関係を絶つことをも決したためらわなかった。<sup>(4)</sup>

こうした絶望的な状況を前に、私たちは、「子どもの家——実験室」を閉鎖する必要性に迫られた。ところが、この決断が公表されることになっていたまさにその当日、折しも大会に参加するためにモスクワに滞在していたドイツの鉱山労働者団体「ユニオン」の代表者が、私たちのもとを訪れた。彼は、ドイツとロシアの鉱山労働者団体の名において、私たちの新しい科学機関の運営を物質的に可能にし思想的にも支援するという申し出を、私たちに提示してくれた。実際にそれ以来(一九三二年四月から)、この施設は、ドイツの団体「ユニオン」からは食料が、ロシアの鉱山労働者からは燃料の一切が、供給されている。そこでこの施設は、その名称を『国際連帯』子どもの家——実験室に改めた。施設の職員らは、共和国のすべての科学機関を管轄する教育人民委員部学術センターから給料を受け取っているが、しかしこの新たな状況において、その人数は半数に削減された。また子どもたちの人数は、十二名に減

少した。

一九二二年の秋には、国立精神分析インスティテュートが設立され、「子どもの家―実験室」は、その補助機関として、このインスティテュートに所属することになった。また当施設は、一九二二年の秋と冬に、二度の査察を受けた。両回とも、施設の教育的活動および科学的活動についての評価は、極めて好意的なものであった。

それでもこのことは、一九二三年の春、「国内の」最も重要な組織を維持するための資金さえ不足していた時期に、政府によって「子どもの家―実験室」の存続が改めて問題視されるのを防ぐことにはならなかった。それと同時に、精神分析的な知見に基づいて教育システムを構成しているような施設の存立は果たしてそもそも望ましいことであるのか、という論争も、再び生じた。教育学者や心理学者の一部はこれに賛成の意を表明したが、ほかの一部は反対の意を示した。<sup>(5)</sup> また、五名の委員から構成される委員会が再び設置された。<sup>(6)</sup> この委員会は、目下の秋の間、当施設の活動を監督する任務を負っている。このようなわけで、当施設の今後のゆくえは、今もなお不確かなままである。しかし、私たちにとっては、教育学者や心理学者たちが精神分析を教育上の諸問題へ適用することに対して示している活発な関心こそ、現代の教育学にとって最も欠くことのできない組織のうちの一つである「子どもの家―実験室」が今後も引き続きその存立を維持することに成功するだろうということへの、最良の保証なのである。<sup>(7)</sup>

## II 「子どもの家―実験室」の内部機構

この「子どもの家」は現在、十二名の子どもを擁しており、その内訳は男の子が五名、女の子が七名である。

第一グループ 三歳から三歳半までの子どもたち六名

第二グループ 四歳から五歳の子どもたち六名

第一グループに所属する子どもたちのうち、四名は開園の当日からこの施設に在籍しており、一名は一年以上、もう一名は四ヶ月間在籍している。第二グループに所属する子どもたちのうち四名は、開設後の最初の数ヶ月の間に入園し、二名は一年半前に入園した。先述の通り、子どもたちは、極めて多様な社会的階層に属している。彼らのうちの幾名かは、孤児ないし片親遺児である。そして子どもたちはみな、身体的にも精神的にも正常に発達している。

いずれのグループも、子どもの家のきれいな庭園邸宅にある二つの部屋で生活している。この二部屋のうち、一つは寝室として、もう一つは遊び部屋や食堂として用いられている。病気になった子どもたちのための隔離室は、自由に利用することができる。

子どもたちの身体的な世話と教育的指導を担っているのは女性の養育者たちであり、彼女たちは六時間ごとに交代し合って勤務している。元来は、いずれのグループにも、四名ずつの女性養育者が担当と

して配置されていたが、現在の状況下では、三名ずつしか配置されていない（「子どもの家―実験室」には、単なる女性世話係はいないのだ）。女性養育者たちの業務には、子どもたちの性格スケッチや日誌、観察記録を作成することも含まれており、業務の引き継ぎの後、毎日そこにメモが記入される。さらに私たちは、年少グループの子ども一人一人についての、欠かさず継続してつけられた日々の記録を有している――具体的には、排泄活動（これは、清潔訓練と関連している）や、昼と夜の睡眠時間の値、肌の状態、食欲、気分についての記録である。

また一定の期間ごとに、子どもたち一人一人の性格スケッチが作成され、実務的な仕事上の必要に応じて、心理学のおよび教育学的な諸問題が議論されている。というのも教育学的な仕事と心理学的な仕事は、総じて互いに密接に関連し合っているのである。言い換えれば、教育学的な業務は精神分析の知見に基づいているのだが、他方でこの教育学的な業務もまた、分析的な観察に対し、未解決の問題を解明したり新たな問題を提起したりすることに役立つような、溢れんばかりの資料を提供し返しているのだ。

### III 「子どもの家―実験室」における活動のための精神分析的原則

一、精神分析は、人間の心には、意識的な精神生活と並んで、無意識の広大な領域が存在する、ということを教えてくれる。幼い子どもは、大人よりもずっと強力に、自らの無意識の支配下に置か

れている。子どもの意識的人格は、ゆっくりと段階的にしか発達しない。

このことから私たちが自分たちの教育活動のために学び取るのは、いかなる教育者も、子どもの無意識の蘊(die Abkömmlinge)を認識し、解釈し、それを意識的な表現の数々から区別する能力を有していなければならない、ということである。私たちは、無意識に由来しかつそれ故に子どもがなす術なく対峙しているような諸々の蠢き(Regungen)のこととその子どもを厳しく非難する代わりに、子どもがそれらを処理できるよう、手助けしなければならない。そうすることで、子どもに自らの弱さを感じさせる代わりに、自らの力を自覚させることができるようになるのだ。

二、精神分析は私たちに、心的生起の二原理を認識することを教えてくれた——すなわちそれは、快原理と現実原理である。幼い子どもは、まだ完全に快原理の支配下に置かれている。子どもの欲動的な追求(Sein triebhaftes Streben)は、現実の要求などお構いなしに、快を獲得することと不快を回避することへと向けられているのだ。

したがって、子どもに外界の現実的状況の意味を徐々に理解するよう教え、そしてそれによって、快原理の克服と現実原理によるその代替を促すことこそ、私たちがなすべき課題だといえよう。

三、精神分析は、子どもの性生活を認めなかったり思春期や性器の成熟期になってはじめてセクシュアリティが発現するとみなしたりするのは根拠のない誤りである、ということを示した。それどころか子どもは、最初から豊かな性生活を有している。しかしそうした性生活は、器官的には性

器と結びついておらず、もちろん生殖機能ともまだ何の関係もない。こう言ってよければ、このような子どもの性生活は、多形倒錯的、と表現できるだろう。正常な大人のセクシュアリティは、このような幼児のセクシュアリティから、一連の再構成を経ながら発達してゆくのである。

しかし、もし幼児のセクシュアリティが生物学的に根拠づけられた合法的現象であるならば、そのセクシュアリティのあらゆる現れもまた、私たちが自分たちの教育活動において考慮しなければならぬ正常で必然的な現象なのである。

#### 四、

子どもの性的発達とは、セクシュアリティの一連の編成を経ながら進行する。これらの編成のことを精神分析は、前性器期と呼んでいる。というのもそれらの段階においては、性器域は未だ支配的な役割を果たしていないからである。またこのとき、個々の性的追求（すなわち、部分欲動）とその対象との結びつきは、自体性愛（すなわち、自らの身体のような様々な領域における満足）から対象選択（すなわち、すべての欲が、ある一つの外部の対象へと統合されること）へと通じる一連の発達を経る。

私たちの教育活動が、普通はほのめかし程度にしか姿を現わさないような諸々の前性器的編成段階を考慮に入れていれば、私たちは、上記の複雑な発達が首尾よく進行するのを容易にすることができよう。また、これに加えて私たちは、このプロセスにおける一步一步が、自分たちの援助的介入を必要とする発達制止の足がかりになり得ることを、知っておかなければならない。

#### 五、

子どものときの性的追求は、極めて多様な運命を辿る。それらは性的な目標から逸らされ、社会的に一層高尚な、もはや性的ではない目標へと向けられることがある。この過程は、精神分析で

は、「昇華」と呼ばれる。しかし、同様の追求が抑圧にさらされることもあり得る。この場合それらの追求は、ある種の心的な妨害によって目標の達成を阻まれ、無意識へと追放されてしまうが、なおも自らのエネルギーを保持しているのであり、結局のところ代替の満足を求めて別の経路へと押しやられるにすぎないのである。

幼児のセクシュアリティのあらゆる現れについて私たちが新たに獲得した理解は、正しい教育的行動を通じて、昇華がより広範に成立するよう促すことを可能にするはずである。もし、幼児の欲動的蠢きのうち、よりわずかな部分だけしか抑圧に陥る必要がなくなり、子どもの精神的エネルギーのうち、より多くの部分が文化的・社会的用途のために温存されるのであれば、はるかに豊かで一層抑制の少ない発達への可能性が、個人にもまた与えられることになるだろう。

## 六、

精神分析の研究は、両親に対する子どもの態度は、肯定的なかたちであれ否定的なかたちであれ、代替の人物たちにも転移され得る、ということを明らかにした。両親のこうした代理人となるのは、主として、教師や養育者、そして(患者にとっては)医師である。教育の現場では、代替の人物に対する肯定的な愛着(Binding)は、快原理を徐々に放棄し現実原理に従属するよう子どもを強く促すために、利用される。一方で、代替の人物に対して否定的な態度にある場合、その子どもは現実の要求に対してもまた、敵意をもって対峙しているのである。

転移のメカニズムに関する私たちの知識は、教育活動のために養育者に対する子どもの愛着を確かなものになければならない、という使命を与えてくれる。この愛着が肯定的なものとなる可否定的なものとなるかは、その養育者の振る舞いにかかっている。するとこのことから、養育

者は自分自身に対して真剣に取り組まなければならないという必要性が、帰結するのである。

七、心的なものにはいかなる偶然も存在しない、ということは、精神分析の一つの前提条件である。

一見すると偶然のようにも思われ得る人間のあらゆる行為、発言、および思いつきは、分析的に考察すれば、無意識的な諸過程によって決定されていることが判明する。

もし私たちが教育活動においてこの観点を堅持するならば、子どもの振る舞いや発言は、そこから子どもの無意識の深層で進行している様々な過程を推知することができるよう示唆の数々を、私たちに与えてくれるだろう。

#### IV 「子どもの家―実験室」における活動のための一般的な教育原則

一、効果的であろうとするならば、教育はすべて、子どもの生後間もない時期から早速開始されなければならない。乳児期は人間の一生における最も重要な時期の一つであり、この時期においてこそ、将来のあらゆる発達の可能性のための萌芽が形成される、ということは、すでによく知られるところとなっている。

二、養育者は、その教育活動において、理論上の考察ではなく、子どもたちを観察することによって

得られる材料に基づくべきである。

三、各子どもに対する教育的振る舞いは、その子どもの個性に即したものでなければならない。

四、子どもの発達に関する生物発生的見解の原則によれば、養育者は、子どもの諸々の現れを（とりわけ、無意識的な蠢きを）主観的に評価することは、いかなる場合も避けなければならない。

五、教育が成功するか否かは、次の三つの重要な条件を満たすことができるか否かにかかっているだろう。

- (a) 養育者と園児との間の関係の確立（愛着、転移については、上記を参照せよ）
- (b) 同年代の仲間たちから構成された共同体での子どもの成長
- (c) 好ましい外的条件の確立、すなわち、教育的に健全な環境の形成

六、生後最初の数年間には、何よりもまず、次の三つの重要な教育課題の遂行に着手しなければならない。

- (a) 現実の要求に対する漸進的な適応
- (b) 排泄過程の統御
- (c) 幼児の欲動的蠢きを昇華することへの準備

## V これまでに述べた要求を満たすための教育措置

### 子どもとその周囲の人々との関係

「子どもの家―実験室」における養育者と園児との間の関係は、相互の信頼と温かな配慮の上に構築されている。このとき養育者の権威は、園児との接触（すなわち、転移）によって置き換えられる。

子どもと仲間の園児たちとの関係もまた、相互の愛情と温かな配慮で満たされている。しかし私たちの経験によれば、このような好ましい関係は、園児たちの人数が各年齢段階にとって適当とされる数を超えない場合にのみ、達成され得る。子どもは、自らは共同体の一員である、と感じるべきなのであって、群衆に埋没した単なる個人である、と感じるべきではない。

ただし、共同体での生活は、共同体のすべてのメンバーが互いに調和していると子どもが感じている場合にのみ、子どもに対して有益な影響を与えることができるだろう。

### 女性養育者たちの振る舞い

「子どもの家―実験室」には、いかなる罰則も存在しない。女性養育者たちは、子どもたちと厳しい口調で話すことすらしないよう、指導されている。

子どもたちについてのいかなる主観的評価も、なされるべきではない。私たちの考えによれば、称賛

や叱責は、子どもにとっては理解しがたい大人の批評の表現であり、子どもの野心と自己感情(Selbstgefühl)を煽ることしか役に立たない。そのため私たちは、子ども自身についてではなく、子どもの行動の客観的な結果のみを評価するよう、常に心がけている。たとえば私たちは、ある子どもが創った家を「とても綺麗だね」と評するが、そのことで子ども自身を称賛することはしない。あるいは、子どもの間で取っ組み合いがあったとき、私たちは手を出した側の子どもに、彼が相手に与えてしまった痛みについて気づかせるのだが、そのことで彼自身を叱責しない、等々である。

女性養育者たちは、子どもたちの前では最大限に控えめな態度をとるよう、自らを律しなければならない。子どもたちの聞こえるところで、彼らの特性や振る舞いに関するいかなる発言も、なされてはならない。これと同様に、子どもたちにとって不適切な会話もすべて、彼らの前では避けられるべきである。

女性養育者たちは、子どもたちに対する情愛的な表現や行為を厳しく控えなければならない。つまり養育者たちは、子どもが彼らに示すあらゆる愛のあかしに対して、温かくはありながらも控えめに対応するよう、自制しなければならないのである。大人たちの側からの激しすぎる諸々の愛情表現(熱烈なキスや親密な抱擁、等々)は、子どもを性的に興奮させたり、子どもの自己感情を貶めたりするものなのであり、したがって「子どもの家―実験室」では厳しく禁じられている。それらは子どもたちの欲求(Bedürfnis)に対し、というよりは、大人たちの満足に対して、はるかに資するものなのだ。

## 健全な外的環境の形成

私たちは、子どもを取り巻くすべての環境を子どもの年齢と諸々の欲求に適合させるよう、努めている。どんなおもちゃもどんな教材も、それぞれの年齢段階の知的要件に見合うように、また、活動することへの衝動(Tätigkeitsdrang)、創造的な諸力、研究活動に伴う快(Forschungslust)を刺激するように選ばれる。新たな欲求が生じたならば、おもちゃや活動のための道具類もまた、それに応じて交換される。

## 現実への適応

子どもが大きな困難の数々を経ることなしに現実の外的条件へ適応するためには、外界はその子どもにとって敵対的な力として立ち現れてはならない。それ故私たちは、現実をできるだけ子どもにとって心地良いものにし、かつ、子どもが断念することを学ばなければならないようなあらゆる原初的な快を、賢明かつ合理的な喜びによって置き換えるよう、努めている。

とはいえ私たちは、子どもの欲動的満足(Friebefriedigung)において、様々な厳しい制限を強いることを避けることができない。子どもは、自らが本来有していた自由に対するこのような制約を、不承不承に辛抱している。またそれは、年齢が幼ければ幼いほど、ますます困難なものなのである。だからこそ私たちは、この際課さなければならぬ要求をできる限り受け入れやすいかたちで表現するよう、かつそうした要求の強化は、ゆっくりと段階的にのみ行うよう、努めなければならない。

私たちは、子どもが必要な制限に従属するのを様々な方法で手助けすることができる。

- (a) これらの要求は、大人の恣意として現れるのではなく、日常生活のあらゆる条件や子どもたちの共同体における生活体制から生じるものでなければならぬ。
- (b) 直接的な命令は抵抗を引き起こすものでしかないので、私たちはそれを子どもに与えることはせず、その代わりに——たとえ最も幼い時期であっても——子どもに対し、私たちが求めていることを理性的に説明しなければならぬ。適切な接触があれば、私たちは自分たちの目的を難なく達成することができるだろう。
- (c) 子どもは、私たちへの愛(すなわち、転移)によって、特定の欲動的満足を断念しなければならない。このようにして子どもが自らに課す制限は、外から強いられた制限よりも長く続いて作用するものである。それらはまた、子どもに対して、抵抗心を煽ることなしに、自分自身の力についての意識を与えるのだ。
- (d) 私たちの経験によれば、強い自己意識と自立精神を備えた子どもたちこそ、最も容易に現実へ適応することができる。したがって、現実に適応することへの道は、自己意識の向上を経ることによって開かれることになるだろう。

## 排泄過程の統御

排泄の諸過程は、幼児の生活において、ある重要な役割を果たしている。つまりこれらの過程は、子どもにとっての快の源泉を形成しているのである——そして、この快を子どもは、極めて不承不承にしか断念しない。

そこで私たちは、ある快の獲得の断念こそが目下の問題なのだということを子どもに理解させる努力をしなければならないが、しかしこのとき同時に、その断念された快を、社会的かつ文化的に高い価値を有する別の快によって置き換えることができるような機会を、子どもに与えなければならぬ。

ただしこの欲動的満足の断念は、養育者の側からの禁止によって達成されるのであってはならない。子どもは、そうしてはならないということによってではなく、自分もまた清潔なままでいられるのだということを長い時間をかけて理解することによってこそ、自らの身体を汚すことをやめるべきなのである。

とはいえ、まさにこの点に関して子どもがそれぞれに有している個人的な特性を理解することからのみ、教育への適切な道が生じてくるだろう。

## 幼児のセクシュアリティ

私たちの「子どもの家」の園児たちは、自分たちの性的な蠢きはほかの自然な身体的欲求とは異なるかたちで評価され得るものだということなど、思いもしない。それ故彼らは、空腹や喉の渇き、眠気に対応する場合と同じようにして、これらの性的な蠢きを、女性養育者たちの目の前で、穏やかに、恥じることなく満足させている。

これらの問題に対する私たちの態度は、子どもたちからあらゆる隠し事を取り除き、女性養育者たちに対する彼らの信頼と愛着を強固なものにし、現実への適応を後押しする。そしてこうすることで、全面的な発達にとって一層適切な基盤を整えるのである。

女性養育者たちは、こうした状況においてこそ、子どもの性的発達の経過を一步一步追いつながら、様々な方法によって(たとえば、砂や粘土、水や絵の具といった特定の素材をしかるべき時期に与えることによって)個々の欲動の蠢きの昇華を促進し、支えることができるのだ。

## VI 養育者が自分自身に対して行うべき作業

幼児のあらゆる欲動の蠢きに対して適切な態度を取ることができるようになるためには、何よりもまず女性養育者が、自分自身に対する分析的な作業によって、自らが受けた教育が遺していった数々の偏見から自由にならなければならない。女性養育者は、自ら固有の抑圧された欲動の蠢きを意識に呼び起し、これらの蠢きと子どもたちとの関わりにおいて彼女の前に立ちはだかつてくる諸現象との類似性を認識しようとしなければならないのである。もし女性養育者が、これらの努力にもかかわらず、反感や嫌悪を感じずに幼児のセクシュアリティの諸々の現れを観察する、ということがどうしてもできないのならば、彼女はいつそのこと養育者という職を完全にやめてしまう方が良いだろう。

どんな大人でも、発達の過程で、自らの性質の様々な特徴を無意識のなかへと抑圧している——もしこれらの性質が、外界の他者のうちに見出されるとき、それらは当人にとって不愉快かつ忌まわしいものとして感じられ、並々ならぬ反感を催させることになる。しかし、分析的な教育を受けた女性養育者であれば、園児の何らかの特徴が特に不愉快かつ神経に障るものとして感じられ、子どもに対する嫌悪

感が生じなかった場合でも、自らのうちで起こっているこうした抑圧の働きを意識化して、その強すぎる嫌悪感の由来を説明しようと試みるだろう。そして、もしそうすることに成功したなら、子どもに対する嫌悪感も次第に消えゆき、その結果として、自然な教育的態度が再び現れ出ることになり得るのだ。<sup>(9)</sup> 分析的な訓練を受けた女性養育者にとっては、特別お気に入りの子どもや虫の好かない子どもといったものがあってはならない。彼女はすべての子どもに対して、等しく好意的な態度をとるべきであるし、どの幼児に対しても、その子の個人的な特性が必要とする分の注意を払わなければならないのである。

子どもたちとの日々の関わりのなかでも、女性養育者が無意識の諸過程の支配のもとで彼らに対するすべての関心を突如として撤回し、それを自分自身へと集中的に向けることで、子どもたちとの接触を失う、という事態が起こり得る。これらの状況下では、子どもたちは不機嫌になり落ち着きをなくす——けれどもその女性養育者は、自らの振る舞いの変化についてまったく自覚的でないために、子どもたちに何が生じているかを理解することができないのである。もし女性養育者が、熟考のすえに、自らの状態の原因について自覚的になることができたなら、そのときにはじめて、子どもたちの機嫌も急速に好転する。<sup>(10)</sup>

## VII 「子どもの家―実験室」での生活から得られた諸々の観察結果

## 一 清潔教育の実践について

私がここで前もって述べておきたいのは、私たちはまだ清潔教育の適切な方法を見つけることができていないと考えている、ということである。したがって、これから述べることは、この点に関して私たちが講じた教育的試みについての報告にすぎない。

たしかに私たちは、二歳を迎える前にはすでに、子どもたちに対して、ある一定の時間間隔でおまるに座るよう促している。しかし私たちが、子どもたちに対して、この方法で彼らの排泄を済ませるよう強制することはない。私たちは、子どもたちがお漏らしをしてしまったときも、彼らを咎めない。むしろこの点については、まるでその事態がまったくもって自然なことであるかのように、気にも留めないのである。

子どもたちがもう少し大きくなって分別を持つようになったとき、私たちは繰り返し、おまるを要求することで清潔なままであいられた機会に対して、子どもたちの注意を向けさせる。このとき私たちは、彼らはもうすでに大きくなっているのだということ、もうすでに清潔さを保つことができるのだということ、そして、もうすでに自らの欲求を自発的に申告する術を心得ているのだということを、強調して聞かせている。

同時に私たちは、子どもたちのために、あらゆる点で健全であり、なおかつ様々な関心で満たされた生活をつくってあげられるよう、努めている。身体的な面に関しては、私たちは子どもたちに、施設や寝具、衣服を清潔に保つこと、朝の冷水摩擦、就寝前の洗身、一週間に一度二歳半になるまでは、一週間に二度の入浴を行うことの習慣をつけさせている。そして、新鮮な空気の中で過ごす時間は、可能な限

り長くなるよう、取り計らっている。

これらの努力の結果は、子どもによって大きく異なる。「子どもの家」の十二名の園児たちのうち五名はすでに、施設へ受け入れた時点で、清潔教育が施されていた。その五名のうち一名は、一歳十ヶ月の女の子であったが、「子どもの家」で再び嬉々として自らの下着を濡らし始めた。このぶり返しは三ヶ月もの間続いたが、その後彼女は、自ずと再び清潔になった。ところでこのとき、彼女の性格全般が変化した。すなわち彼女は、内向的かつ寡黙で、反抗的でもあった子どもから、親しみやすく陽気で社交的な女の子へと、すっかり変貌を遂げたのである。

それまでにまだまったくしつけを受けていない状態で「子どもの家」にやってきた七名の子どもたちは、今では、日中に自らの欲求が生じたときはかならず申告し、清潔さを保つことができている。二名の子どもは、例外である。彼らは可能な限りまで尿を我慢するのが常であり、そのために彼らは時々自らの下着を多少とも湿らせてしまうのである。しかし彼らといえども、本当にお漏らしをしてしまうということは、もはやない。

とはいえ夜間となれば、状況は一層ゆゆしきものとなる。たとえば、十二名の子どもたちのうち二名は、時々おねしょをし、五歳の男の子一名と四歳半の女の子一名は、習慣的な夜尿症である（後者の子どもたちは、三歳になってようやく私たちの施設に受け入れられた。それ故、こうした変調の原因は、家庭での教育に見出し得るものであるだろう）。

清潔さの問題に対する子どもたちの態度は、まったくもって冷静かつ意識的であり、そこに彼らの反抗的な態度や気まぐれさが見出されることはない。また子どもたちが、羞恥の感情や「恥辱」という概念を、これらの過程と結びつけることはないのである。

私たちの方法は、排泄過程を自ら統御できるようしつける教育が通常であればたびたび引き起こしてしまう厳しいトラウマティックな経験から子どもたちを保護する、という目的にとって、適切であるように思われる。とはいえこの方法は、これらの源泉から獲得される快の断念が十分に迅速かつ徹底的なかたちではいまだに進展していない、という点において、不完全である。このことは、私たちが、どのような快が断念された排泄過程における快の代替物として最も首尾よく子どもの役に立ち得るのか、ということを解明したときに、おそらくはじめて達成され得るものなのだ。

## 一 幼児のセクシュアリティの現れとそれを昇華する方法について

### 口唇性愛的活動——おしゃぶり

私たちは、子どもたちに、おしゃぶりをする完全な自由を与えているが、その一方で、子どもたちの関心になりそうなものを様々に創り出すことによって、この原初的な喜びへの固着を予防することに努めている。私たちの施設の子どもたちは皆、三歳のときには、おしゃぶりをきっぱりやめていた。また重要なことに、ある事例では、病氣の際に医者から「おしゃぶりをしない方が良い」と言い聞かせられていた子どもが、自主的かつ意識的にこの習慣をやめたことすらあった。

ある三歳の女の子は今もなお、眠りにつく際に、自らの下唇を吸っている。

あるいは、別の三歳の男の子は、キスの際に、相手の唇に吸い付く習性を有している。この子どもはまた、様々な物体(たとえば、パンくずや紙切れ、花、ボタン、釘等々)を好んで口の中に入れる。

## 肛門性愛

(二歳を迎えるまでの)最も幼い子どもたちに関して、私たちは、彼らは好んで長時間おまるに座り続けている、ということに気がつくことができた。また子どもたちがこのように振る舞うことは、いかなる方法でも妨げられなかった。しかし今では、これらの願望が観察されることはない。以前であれば子どもたちは、用便を済ませている間、その排泄過程とこれに伴う感覚のとりこになりながらおまるに座っていたのだが、今となってはこの時間は、遊ぶこと、とりわけ積み木遊びをすることを常としている。同時に、おまるに對する愛情深い関心もまた、はつきりと観察され得た。すなわち子どもたちは、(このおまるがきれいに洗浄されたとき)おまるを使って楽しそうに遊んでいたのである。けれどもまもなくしてこれらの遊びは、新しく、子どもたちにとって一層関心を引く遊び(たとえば、砂や水を用いた遊び)にとって代わられた。また程なくすると、人形やほかのおもちゃをおまるに座らせるという傾向が現れた。排便それ自体に對する関心は、一歳になってから三歳を迎えるまでの間に、様々な程度で現れた。子どもたちは、自らの排泄物、そして、ほかの子どもたちや飼育動物たちの排泄物に對しても、関心を持ち始めたのである(つまり、自らの糞便の多さを誇っているのだ)。彼らは様々な動物の糞便をそれぞれ識別することができるようになり、また、なぜ動物は糞をおまるではなく地面にするのか、ということや、なぜこの動物たちの糞便はほかのものと異なった外観をしているのか、ということ等を問うたのであった。

三歳から三歳半の間には、排泄物の匂いに對する関心が現れた。ほとんど例外なくこの匂いは、子どもたちにとって不快なものとしては知覚されておらず、まだ何の嫌悪感も喚起していない。子どもたちは食事の際、冗談まじりに料理を「うんち(Kaka)」と呼び、そしてそれをいつもの二倍の食欲でもって

平らげることがある。

二歳半以降、自らの糞便で身体を汚すといったことは、もはやほとんど生じない。しかし、ある女の子に關していえば、自らの糞便で自分自身を塗りつけることが彼女にある特別な喜びをもたらしていたことを、はっきりと觀察することができた。

夏のはじめ、(二歳から三歳の)子どもたちは、排泄過程をお互いに觀察しあうようになった。この相互觀察の機会を与えてくれたのは、散歩であった。というのもこうした散歩の際、排泄の欲求はしばしば屋外で果たされなければならなかったからである。この排泄のとき、子どもたちは常にそれを後ろから觀察することができるような位置に立つのであり、便柱が排泄された際には、皆一緒に喜び合った。この場合、彼らの関心はもっぱらその便柱に局限されており、露出的な快の表出が顕著になることはなかった。

肛門過程と關連するものはすべて下品であり忌避されるべきものである、ということについて、子どもたちは何も教えられていない。だからこそ、子どもたちの人生におけるこの重要な部分に対する彼らの態度を注意深く觀察し続けることは、大人にとって容易なものとなる。子どもたちは決して隠し事することなく、觀察したことや疑問に感じたことの数々を、信頼を持って私たちに伝えている。その結果、昇華は正常に進展する。子どもたちは、砂、絵の具、水、粘土を、これらの追求の昇華を促進するための用具として受け取る。

尿道性愛の現れは、それほど顕著なものではなかった。夜尿症や清潔教育等々については、本章第一節を参照されたい。子どもたちは、水、特にぬるま湯や蛇口、(そして、とりわけ男の子たちは)水の噴出に對して、強い愛好を示す。しかし、自らの尿の噴出に對する格別の関心が觀察されることはなかった。

## 皮膚性愛、筋肉性愛

皮膚性愛は、女の子において一層顕著な現象であるが、男の子においても見出され得る。これらの追求の満足のために子どもたちは、なめらかなもの、ざらざらしているもの、やわらかなもの、毛羽だったもの等々といった、あらゆる性質の、できる限り多様な素材を受け取る。<sup>(11)</sup>

筋肉性愛は、特に男の子において、はっきりと前面に現れる。このうち、制止が微弱にしか発達していないある男の子は、ほとんど純粋な運動類型の典型例である。これに対して、早くから制止が現れていたある別の男の子は、思索家的な類型の典型例である。すなわち彼においては、すべてを究明したり論理的な一般化を行ったりすることに努める傾向が見受けられるのである。

自身の運動の快を満たすことにおいて、子どもたちはいかなる点においても妨げられることはない。むしろ彼らは、走り回り、飛び跳ね、よじ登る等々のことをする機会を有している。すべての子どもたち、とりわけ男の子たちは、器用かつ安定的に、力強く身体を動かす。また、三歳から三歳半の間にはすでに、彼らは、はさみで紙を裁断すること、ハンマーで釘を打ち込むこと、パン、野菜、キノコを切ることの術を心得ている。このようなかたちで子どもたちは、自らの追求を思うがままに満足させる機会のみならず、それらを文化的に役立てる機会をも有しているのだ。

## 自慰

私たちの子どもたちは、比較的わずかしき自慰を行わない。彼らの自慰的傾向は周期的なものであり、またその傾向は、女の子の場合よりも男の子の場合の方が、頻繁に発現するということが、観察されている。しかしいかなる子どもにおいても、自慰的活動が恒常的な習慣にはなっていない。

私たちは、子どもの自慰における二つの種類を区別している。第一の種類の自慰は、性器的諸領域から発する純粋に身体的な刺激によって引き起こされ、それらを満足させるために機能し、四歳になってから七歳を迎えるまで、ほとんど規則的に生じる。一方で私たちは、この種類の自慰と、外的世界から受け取った(と主観的に解釈された)侮辱や貶め、自由の制限といった心的体験への反応として生じる種類の自慰を、別のものと考えている。

この区別に応じて、私たちの振る舞いもまたまったく異なるものとなる。私たちは、前者の種類の自慰を、正常で合法的な現象とみなしている。この現象に対して何か特別な措置を講じる必要はまったくないので。というのも私たちは、子どもたちが健全な環境と身体の適切な手入れのもとで発達する場合、こうした現象が過剰に生じることはないだろう、と考えているのである。しかし後者の種類の自慰となれば、状況は異なる。この場合私たちは、個別の事例ごとにその自慰的活動の原因を対話によって取り除き、子どもの内面に正常な心的均衡を再び取り戻すことが必要だ、と考えている。また私たちは、子どもが現実から完全に目を背けることになるほどまでに自分自身の内面や自らの体験に対する思い悩みへ深く没入したままにはさせないよう、とりわけ気を配っている。子どもの気分の不調が払拭されるやいなや、自慰的活動への衝動もまた鳴りを潜めるのだ。

さらに自慰的活動は、もしそれが生じる場合には、女性養育者たちの目の前で、隠されることなしに行われている。子どもたちは、これらの追求を非難するようには教えられておらず、そもそもその存在に対してわざわざ注意を喚起されることがないのである。自慰的活動はほとんど睡眠前においてのみ生じ、他方で日中は、ほかの生き生きとした関心ですっかり満たされている。子どもが仲間たちと一緒にいることができず、多くの制約を我慢しなければならぬ病臥の際には、自慰の傾向は強まるのが常で

あるが、病気が快復し、普通の生活に復帰した際には、この傾向はその都度再び消滅するのである。

### 性的好奇心——自分の性器と他者の性器に対する関心

(三歳から三歳半までの)年少のグループの子どもたちは、確かにすでに女の子と男の子の身体的形態における差を識別しているが、しかしまだこれらの問題に対する特別の関心を示してはいない。また、(四歳半から五歳までの)年長のグループにおいては、性的好奇心はおよそ三歳になってから四歳を迎えるまでの間に発現し、短期間のうちにその強さを増幅させたのだが、その後まもなくすると、この勢いは再び減退した。私たちは、子どもたちに対し、相互に観察し合う完全な自由を与えた。自らの裸体に対する見解は、仲間たちの裸体に対する見解と同じように、まったくもって客観的で冷静なものであった。彼らは、暑い日には、全裸の状態で動き回っている。つまり、明らかに彼らはこのように振る舞うことを快に満ちたものだと感じているのだ。また子どもたちは、睡眠の際もシャツを脱いで全裸になるのだが、彼らはこれを当然のことだと考えている。

ところで私たちは、性器に対する関心は、子どもたちが裸になっているときではなく、服を着ているときにこそ示されるものである、ということに気がつくことができた。

子どもたちは、(性差や、子どもの出生の由来、腸の諸機能についての)すべての問いに対する、明確で嘘偽りのない回答を受け取っている。

### 三 子どもと両親の関係性について

子どもたちは、すでに二年前から施設で暮らしており、また年少グループの子どもたちにおいては、すでに一歳から一歳半のときには親元を離れたにもかかわらず、両親との生き生きとした関係は、依然として保たれている。両親は毎週日曜日にこの施設を訪れ、時折子どもたちを引き取って、自宅へ連れて帰ることもある。こうした両親の訪問の際、子どもたちは大変な喜びを示すが、お別れのときに泣いたり抵抗したりすることはない。また、子どもたちは女性養育者たちに深く親しんでいるが、それでもやはり両親を強く愛しているのであり、しばしば両親を思い出したり、「母と子」ごっこを好んで遊んだりしている。

子どもたちは、両親の権威性や両親からの支配等々といったものと、何の縁もない。だから、父親と母親は、子どもたちにとって偉大で愛すべき理想的存在なのである。したがって、こうした両親と子どもとの良好な関係は、養育が親元以外の場で行われる場合においてのみ成立し得る、と考えることもまた、決して不可能ではないのだ。

モスクワにて 一九三三年九月二四日

## 補遺——年少グループの日誌からの抜粋

## 社会的感情の発達のために

(一九三三年六月一六日)朝食時、(二歳十ヶ月の)ジェーニヤは大変わがままであった。その終わりがけに、次のような展開が生じたのである。

ジェーニヤは、小皿を持ってきてほしいとせがんだ——彼は、その小皿の上に自分のパンをひとかけ乗せたかったのである。私は彼にそれをわたしてあげた。すると彼は怒ってその小皿を払いのけ、次のように述べた——「こんなのいやだ。べつのがほしいよ」。しかし、私が彼に別の小皿を与える間もなく、(三歳三ヶ月の)ヴォリークが、ジェーニヤが拒絶した小皿を指さして、次のように述べたのである——「でもぼくは、やっぱりこれがいいよ。それ、ぼくのだよ。ちょっとくろくよこれちゃっているその小皿」。

その瞬間、ジェーニヤは、おそらくはヴォリークを挑発するために、その小皿を強くつかみ、決してそれを手放そうとしなかった。ヴォリークは、小皿を奪い取ろうとしたが、ジェーニヤはそれを引き渡さなかった。そこで私は、食事中的のこのひと悶着を終わらせるために、そこへ介入しなければならなかったのである。

すでに激しい怒りをあらわにしているジェーニヤをこれ以上刺激しないために、私はヴォリークに対し、ジェーニヤに小皿を使わせたままにするよう、説得した。ヴォリークは、これを聞き入れたが、不

機嫌な様子で、じっと座り込んでしまった。ほかの子どもたちもまた、この決着に対し、不満があるようであった。たとえば(三歳五ヶ月の)ヘディは、次のように口にした——「ちがうわ、それはヴォリークの小皿でしょ。ジェーニャはその小皿を自分からつかおうとはしなかったけれど、ヴォリークはその小皿がよかったのよ。だってジェーニャはあとになってその小皿をほしがったけれど、ヴォリークはもとまえにほしがっていたじゃない」。そのとき、小さなベッドに横たわっていたヴェラが、私を呼びつけた。そして私は、その事態の成り行きを、遠目から観察していたのである。すると、私が顔を背けるか背けないかのうちに、(二歳十ヶ月の)ヴォロージャは自分の席から立ちあがって、ジェーニャから小皿を取り上げ、それをヴォリークに手渡した——「はい、ヴォリーク。これはきみのだよ」。ジェーニャは泣き出した。一方でヴォリークはコーヒースプーンをすすっており、その横に当の小皿が置かれている。彼は何度か、その小皿をつかみ取って、手のうちで転がして遊び、再び元の場所に置く、といったことを繰り返した。そして最終的に、ヴォリークはジェーニャにその小皿をきっぱりと差し出した——「ほら、ジェーニャ。ぼくはもうこれであそび終わったから。こんどはきみがあそびなよ」。ジェーニャはすぐに泣き止み、小皿を受け取って、それからヴォリークの手をそっとさすった——「だいすき、ヴォリーク」。「ぼくもだいすきだよ」とヴォリークが返すと、子どもたちも喜ばしげに笑いあった。「ぼく、きみのともだちだよ、ヴォリーク？」とジェーニャが聞くと、「うん、きみはぼくのともだちだよ」とヴォリークが答えた。ここへヘディがやってきて、「それから、わたしのともだちだよ！」と伝えると、イーラとヴォロージャもやってきて「それからそれからわたしのともだちだし、ぼくのともだちだよ！」と口々に言い合った。ジェーニャは幸せであり、皆の顔は輝いている。

(一九二三年六月二九日)(二歳十ヶ月の)ジェーニャは、昨日、プレゼントとして手押し車を手に入れた。彼は、その押し車の中に木製のボールを入れて、あちこち運んで回っている。そこへ(三歳三ヶ月の)ヴォリークがやってくる。彼は、自分の小箱を運んで回ってみたいくて、ジェーニャにその押し車を貸してほしいと頼むのである。ところがジェーニャは、腹を立てて次のように答える——「これはぼくの手押し車なんだ。きみにはかしてあげないよ」。これに対してヴォリークは、「そしたら、ぼくの箱をきみのところへおくからさ、きみがこれをその小っちゃなボールといっしょにはこぶんだ」と、平和的に提案をする。するとジェーニャは、激しく叫ぶ——「どっかいっちゃえ!」。ヴォリークは、むっとしつっ、しょんぼりとした様子で、立ち去ってしまう。

このとき私たちは、たくさんの花々が一面に生い茂る草地へたどりつく。子どもたちは、花を摘み始める。ヴォリークが花を摘んでいる間、彼の小箱が、すぐ近くの草むらに置かれている。するとジェーニャがやってきて、この小箱を取ろうとする。遠くから、ヴォリークが叫ぶ——「とっちゃだめ、それぼくのなんだよ!」。ジェーニャは、今にも泣き出しそうな様子で、次のように述べる——「でもぼくだって、この小箱がほしいんだもの」。そこで私は、ジェーニャに対し、次のように伝える——「わかるでしょう、ジェーニャ。ヴォリークがあなたに小箱を貸してくれないことは、嫌だよ。でもそれと同じように、あなたがヴォリークに手押し車を貸してあげようとしなかったのは、ヴォリークにとって嫌なことだったの。いつか別の機会に、彼が望むものを、貸してあげてごらん。そうしたら彼もまた、あなたに貸してくれるはずよ」。このときヴォリークは少し近づいてきており、この話に注意深く耳を傾けている。そして私が話し終えるやいなや、彼はジェーニャに自らの小箱をきっぱりと差し出す——「ほら、ジェーニャ。ぼく、おかえしなんていらなから、このままきみにかしてあげるよ」。ジェーニャ

は喜んで、小箱を受け取り、すぐにそこから走り出そうとするが、突如としてその場に立ち止まって、親しげに尋ねる——「ね、ヴォリーク、ぼくの車かしてほしい?」「うん、ほしい! ぼく、ほしい!」

——ヴォリークは、嬉しそうに答える。ジェーニャは、自分の荷車のところまで駆けていくが、しかしそのとき、それはすでに、(二歳十ヶ月の)ヴォロージャの専有するところとなっている。当人は、自分の遊びに夢中になっていて、車をヴォリークに譲り渡そうという気は、さらさらしない。ジェーニャはそこへ佇んだまま、あれこれ熟考する。彼の眉は、きゅつとひそめられ、視線は、ある一つの点に向けられていたのだ。やがて彼は、ヴォロージャの方へと一歩近づき、足を止めたかとおもえば、彼に背を向けて数歩逆進し、しかしやはりまた引き返してきて、ヴォロージャのところへ俊敏に駆け寄り、次のように尋ねる——「ヴォロージャ、二つの小箱、ほしくなあい?」。ヴォロージャは満足して、そして車をヴォリークに差し渡すのだ。

こうして、皆が幸せである。ジェーニャは一つの小箱を、ヴォロージャは二つの小箱を、そしてヴォリークは手押し車を、その手に抱えているのである。

### 子どもたちの知的発達のために

(一九三三年六月二十四日)(三歳三ヶ月の)ヴォリークは、いちこの花を見つけ、次のように言う——「この花をもぎとってはいけないね。だってあとでここにいちこの実がなるんだから」。そこへ(二歳十ヶ月の)ジェーニャが駆けてきて、いちこの花をもぎとってしまう。ヴォリークは、心の底から悲しくなる——「ああっ! この子がおはなをもいじやった。いちごはもう、みのらないね」。そのとき、(三歳五ヶ月の)

ヘディが憤慨して、次のように問います——「ちょっと、ジェーニャ！ なにしてくれているのよ？

いったいなんのために、おはなをいだりしたの？」。ジェーニャは、軽々しく答える——「だってそうしたかったんだもん！」。ヘディが言い放つ——「したらあんたは、もういちごをたべられなくなってもいいってことね！」。ジェーニャはぼつが悪そうに黙りこみ、そして消え入りそうな声で答える

——「たばたいにきまつてるじゃん」。ヘディが責める——「だけでもうちごはできないのよ」。するとジェーニャは当該の場所へ行き、花を元あったところへ置き戻す。そうしたとき、皆が嬉しそうに笑う。ヴォリークが、私のもとへやってきて伝える——「ママ！ ねえママ！<sup>(12)</sup> ジェーニャがおはなをもとのぼしよにもどしたよ、そしたらまた、いちごの実になるね！」。私はかれらをがっかりさせたくなかったのだ。

数分後、ヴォリークは、別の花を指し示す——「そしたら、このおはなはつみとっちゃってもいいのかな？ ここからいちごの実にはならないの？」——「ならないわ」——「だったらここには、なにができるの？」——「種よ」——「たね？ それってぼくたちが花だんにまいたみたいなの？」——「そうよ」——「じゃあ、このたねをまたまくことができるってこと？」——「そう」——「だったらぼく、ここのおはなたちはつみとらないことにするよ。ここにあるのがたねになったらいいな、そうになったら、またそのたねを花だんにまくんだ」。

## 付録——ヴェラ・シュミットによるロシア語版のための序文<sup>(13)</sup>

この著作は、フロイト教授のために執筆され、一九二三年一〇月、ウィーンにて、同氏に渡された報告書である。この報告書は、そのはじめは『子どもの家―実験室』の仕事についての報告』という題であったが、後に、国際精神分析出版所から、「ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育」という仰々しい表題を冠した一つの小冊子として、ドイツ語で刊行された。ロシア語では、本報告書は、一九二三年の冬にロシア精神分析協会にて通読された。

このように、本報告書は、当初は精神分析家を対象としたものであり、したがって精神分析に関するすべてのことは、極めて簡潔かつ要約的に論じている一方で、本問題の教育学的側面には、ことさら詳細に立ち入っている。この意味において、ロシアでの出版のためには、私たちの「家」で行われている精神分析的なアプローチに関連するすべてのことを補充し、大衆にとっても理解し易いようにして、いくらか修正を施さねばならなかった。

このほかにも、ドイツ語で出版されたもののうち第一章および第二章は削除され、その代わりに新たな第一章だけが執筆された。また第六章も、同じように削除されている。大幅に拡充された補遺は、まったく新しいかたちで構成されている。<sup>(14)</sup>

## 解題

本稿は、一九二〇年代のソ連において発展した精神分析運動の中核的施設「子どもの家―実験室」(Детский дом-лаборатория)の活動内容について、当施設の責任者ヴェラ・シュミットが著し、一九二四年に国際精神分析出版社より刊行された資料『ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育』(Psychoanalytische Erziehung in Sowjetrußland)を翻訳したものである。

### 一 資料『ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育』が作成されるに至った経緯 ——当資料が書かれるまでのロシア精神分析運動の道行き

二〇世紀初頭のロシアにおける精神分析の受容は、寛容かつ迅速といえるものであった。たとえば、最初期のロシア精神分析運動の活動として、ロシア国内・外の精神科医、精神分析家の著作、論考、翻訳を、可能な限り幅広く掲載、紹介することに努める学術雑誌『精神療法——精神治療と応用心理学の問題の評論』(Психотерапия. Обзорные вопросы психического лечения и прикладной психологии)や、論文集『精神療法叢書』(Психотерапевтическая библиотека)が刊行されていた。前者の刊行物は一九一〇年二月に、後者の刊行物は一九一一年に、モスクワにて創刊されたが、これは、『精神分析・精神病理学研究年報』(Jahrbuch für psychoanalytische und psychopathologische Forschungen)や『精神分析中央誌』(Zentralblatt für Psychoanalyse)といったフロイト派の初期の公的有力雑誌創刊と、ほとんど同時期であった。<sup>(15)</sup> また、同じ

くモスクワにて、多分に精神分析的志向を有した精神医学会「小さな金曜日」(Малые пятницы)が、一九一二年二月より定期的に開催されていた。当会議は、医師のみならず、精神医学の隣接分野に携わる専門家らにも広く開かれたものであり、すでに一九一二年三月の会議では約六十名が参加するほどの規模となっていた。<sup>(16)</sup> こうして精神分析は、革命前にはすでに、少なくともモスクワ、ペテルブルグ、カザン、オデッサ、キエフ、ロストフ・ナ・ドヌのインテリゲンツィアにとって、なじみのある学説となっていたのである。<sup>(17)</sup>

活気溢れるロシア精神分析運動は、一九一四年の第一次世界大戦、一九一七年のロシア革命、そしてそれに引き続く内戦によって断絶を余儀なくされるも、一九二一年頃から混乱が収束に向かい始めた社会の状況に伴うようなかたちで、往時の熱量を取り戻してゆく——しかしこれは決して、革命前の運動の単純な再開だったわけではなく、後述するように、「一九二〇年代前半のソビエト社会」という特定の時空間的条件に強く規定された、一つの歴史的所産でもあったことは、特記しておくべきだろう。基本的な制度としては、精神分析協会が、モスクワとカザンにて、一九二二年に結成され、精神分析的教育施設「子どもの家—実験室」が、モスクワにて、一九二二年八月に創設された。これらの施設の運営は、主として、モスクワの精神科医イヴァン・ドミートリエヴィッチ・イェルマコフが率いるものであったが、彼は一九二二年、オデッサの精神分析家モイセイ・ヴルフとともに、『心理学・精神分析叢書』(Психологическая и психоаналитическая библиотечка)と名された、精神分析関連書物の一連の出版活動を興し、これにもなお力を入れていた。党・政府による検閲や管理のもとで、精神分析運動に関わる諸制度がかくも円滑に組成されたのは、それらが、国家の上層部——たとえば、教育人民委員部長アナトリー・ルナチャルスキーや、レフ・トロツキー、レーニンの妻であるナデージダ・クルプスカヤ——らによつ

て高い関心を寄せられていたからであり、また精神分析運動の活動者らのうちに、政府内の指揮を執り得る人物が多く存在していたからでもあった。

ソビエトの精神分析学者らは、国外進出に対しても意欲的であった。一九二二年九月、ベルリンで開催された第七回国際精神分析大会においてはじめて、モスクワ精神分析協会の国際精神分析協会（以下、IPV）加入の問題が俎上に載せられた。しかし、この大会では、モスクワ協会が IPV の規約を十分に満たしていなかったことを形式上の理由として、当初の目的は果たされなかった。<sup>(19)</sup>そこで、露側は大会後すぐさま指定の条件を満足させ、さらに一九二三年一〇月、代表者ヴェラ・シュミットとその夫であるオットー・シュミットが、ベルリンにてアブラハムと、ウィーンにてフロイトとオットー・ランクと会い、ロシア精神分析協会の IPV 入りを直談判した。<sup>(20)</sup>これが功を奏して、一九二四年、ザルツブルクでの第八回国際精神分析大会にて、露協会はついに、IPV の支部協会としての正式な承認を得ることになったのである。

資料『ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育』は、まさしく、露協会が国際的地位を確立するために繰り広げたこの奮闘のただ中で生み出されたものであった。すなわち、この資料は、一九二三年のフロイトとの会見にあたって、ソビエト精神分析運動の独自性——社会主義体制下で運営される精神分析的な教育施設——とその成果の有益性を示すべく作成されたマニフェストだったのだ。

## 二 ソビエト精神分析運動の特徴と、その成立の前提条件としての時代背景

一九二一年から一九二〇年代中盤にかけてのソビエトの地で精神分析運動が進展し得たことは、この

時代が所謂「ネップ期」と区分される期間下であったことに關係している。ネップ、正称「新經濟政策」(Новая экономическая политика)とは、革命後の内戦時における党・政府のいき過ぎた物資徵発が原因で深刻化した社会問題を解決すべく、一九二一年にレーニン主導のもとで採用された經濟政策であるが、その最大の特徴は、国家の存立を保守し、なおかつそれを發展させるために、ソビエトの国是とは本来相容れないはずの資本主義的原理を部分的に導入することが認められた点にあった。するとこの性質の故に、当政策の施行によって、ソビエトの發展と利益に寄与し得る限りでの多元主義という精神的傾向が、社会のあらゆる領野において、一概に高まることとなったのである。学問的にもまた、ソビエト社会が孕んでいた諸問題の解決に貢献し得る限りにおいて、あるいは戰鬭的唯物論との調和可能性が見出される限りにおいて、西側の諸科学を——精神分析もまた然り——研究し、それについて様々に議論することが可能であった。<sup>(22)</sup>

したがって、この時代のソビエト精神分析運動は、次のように特徴づけられなければならない——すなわち、この運動は、イデオロギー的枠組みのなかで精神分析の自立性を確立することを試みた営みとして解釈されるべきものである。現に、かかる観点でもって、資料『ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育』を検討するならば、運動の実践的結実としての「子どもの家―実験室」もまた、体制から課される期待への応答と、精神分析的教育の確立に向けた真摯な追求との両立に力を尽くす営みであったことが、看取され得るだろう。<sup>(23)</sup>

### 三 ソビエト精神分析運動の一九二〇年代前半以後

各領域がある程度の自立性を持ち得た一九二〇年代前半に比して、一九二〇年代中頃からは、学問上の議論における政治性の程度が、徐々に高まり始めることとなる。一九二五年あたりからソビエト自然科学哲学界で展開された機械論者と弁証法論者との論争において、後者のデボーリン派が一九二九年に勝利を収めることとなった経緯は、その時代性を示す一例である。すなわち、この勝利は、単に議論の論証性の高さから帰結したものではなく、政治的な立ち回りの巧妙さ——具体的には、デボーリン派が、論争の初期段階から党機関誌『マルクス主義の旗のもとに』(Под знаменем марксизма)という言論拠点を事実上自陣営の統制下に置いていたことや、機械論を、当時の党内政策闘争においてスターリン派に糾弾されていたブハーリン派の理論と意図的に結びつけ、論敵に政治的異端の烙印を押し、それを放逐したこと——によって獲得されたものだった。<sup>(24)</sup>

論戦の勝敗が政治的「正統」性によって規定されるこのような趨勢において、当のデボーリンが一九二五年、「形而上学的」、「ブルジョア的」、「個人主義的」といった語を用いながら「フロイト主義」を論難したこと、あるいは、レーニンの死(一九二四年)の後、党内覇権闘争で真っ先に排斥されたトロツキーが、精神分析と唯物論の整合性を予てから主張していたことは、<sup>(25)</sup>精神分析運動に対する決定的な痛手となった。運動に関与していた学者たちは、ほどなくして、辞職するか国外へ亡命するか、さもなくば、公的に容認される別の学問領域へ転向することを余儀なくされた。「子どもの家―実験室」は、一九二五年八月一四日付の教育人民委員部の決議を受けて、閉所へと追い込まれ、かろうじて命脈を保っていたロシア精神分析協会の活動や翻訳活動もまた、表立った実践としてはいずれも、一九三〇年を限

りに途絶えることとなった。<sup>(27)</sup>そして、以降、精神分析は、それに言及すること自体が非難の対象となるか、あるいは言及が避けられない場合も厳格な批判的注記を伴うような、限定的かつ否定的な形態としてでしか、存在し得なくなったのである——同様の注記はなお付されながらも、精神分析の概念的な議論が公の場で再び可能となるには、一九五八年に開催された「現代フロイト主義とのイデオロギー的闘争に関する科学会議」(Научное совещание по вопросам идеологической борьбы с современным фрейдизмом)を、それらの諸概念の学術的な有用性が再考されるには、一九七九年にトビリシで開催された「無意識的な精神的活動に関する国際シンポジウム」(Международный симпозиум по проблеме неосознаваемой психической деятельности)を、そして精神分析が公的な医療的・教育的枠組みへと統合されるには、一九九六年にボリス・エリツィンによって発表された大統領令「哲学的、臨床的、および応用的な精神分析の復活と発展について」(О возрождении и развитии философского, клинического и прикладного психоанализа)を待たねばならなかった。<sup>(28)</sup>

かくして、初期ソビエト精神分析運動は頓挫した。けれどもそれは決して、同運動の歴史的舞台からの追放を意味するものではなかったことを、本課題の締めくくりとして、余論的に言及しておきたい。

一九六〇年代後半に世界各国で立ち興った社会運動、所謂「六八年運動」のなか、西ドイツは、ナチズムやファシズムの再来を防止することを主要な問題の一つとして掲げており、このことから、既存の秩序に盲従し、結果として独裁を許容することになり得るような人格ではなく、自律的で自己決定が可能な人格を有する子どもを育成するための場として、「キンダーラーデン」(Kindergarten)と称される私設共同保育所が同地各所で設置されていた。西ベルリンでは、権威主義的な性格の温床をブルジョア的な核家族における親子関係や婚姻関係に見たテオドル・アドルノの理論から着想を得て、生活のあらゆ

る領域を共同化するコムーネ運動(I・II)が生じ、このうち理論的実践により重きを置いたコムーネIIを中心としてキンダーラーデンが運営されていたが、当活動において、親に対する固着やそれに伴う抑圧を解体することに努めた共同体教育の歴史的モデルとみなされたのが、「子どもの家―実験室」であった。<sup>(29)</sup>

「子どもの家―実験室」のこうした復権の契機として、ヴィルヘルム・ライヒの影響を考慮しないわけにはゆかない。ライヒは、とりわけコムーネIにおいて盛況した「性革命」の理論的基礎に位置づけられていた人物であったが、<sup>(30)</sup>その彼が、著書『文化闘争におけるセクシュアリティ——人間の社会主義的再構築に向けて』(Die Sexualität im Kulturkampf: Zur sozialistischen Umstrukturierung des Menschen)、ないし同著の英訳改訂版である『セクシュアル・レボリューション——自律的な性格構造に向けて』(The Sexual Revolution: Toward a Self-Governing Character Structure)のなかで「子どもの家―実験室」を取り上げ、これを自らの思想的要請を体现するものとして称揚していたのである。<sup>(31)</sup>

社会主義革命を起こすだけでなく、資本主義体制が強いた性―否定的道徳規範によってすでに大衆が深く内面化している権威主義的・体制順応的な(すなわち反動的な)精神構造をも変革することなしには、旧来の支配―抑圧体系の根本的解体は不可能であるとする立場にあったライヒは、後者の変革のために、性―肯定的な社会環境を創出することの必要性を主張していた。というのも彼にとって、反社会的とされ、抑制の対象となる衝動とはそもそも、道徳が人間の自然な欲求を抑圧することそれ自体によってもたらされた、相対的で二次的な産物にすぎなかった<sup>(32)</sup>——したがって、その反対に、自然な性的欲求が肯定され充足され得る環境下であれば、反社会的衝動は無化され、ひいてはそれを問題視する考え自体も成立しなくなり、こうして大衆の精神構造が、外部からの介入を要しない自己調整的なものに再構築さ

れ得る、と考えられたのである。「子どもの家―実験室」は、まさにこの過程を、すなわち、自律的な性格構造を養成するために性的な自由を確保することを教育学的に実践した点において、ライヒにとって特別な意義を有していたのだ。

運動に対するライヒの影響が同様に大きかったフランスでは、一九六九年、資料『ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育』の翻訳が、立て続けに世に出た――具体的には、ジネット・ベルトーおよびジャン＝マリイ・ブロームの共訳が、同年二・三月合併版の『パルチザン』(partisans)誌第四六号に、そしてジャン＝マリイ・マターニュによる単独訳が、同年三月刊行の『レ・タン・モデルヌ』(Les Temps Modernes)誌第二七三号に掲載されたのである。<sup>(33)</sup>このときマターニュが、翻訳に付した簡単な序文において、「子どもの家―実験室」の活動内容に今日的な政治的価値を見出していたこと、あるいはブロームが、同翻訳をも収録したヴェラ・シュミットとアニー・ライヒ(ヴァイルヘルム・ライヒの一人目の妻)の著作の選集を作成した際、その解説において、シュミットと両ライヒの所論を、現代の進歩的な教育学者が手に取って資本の制度に向けるべき「理論的ミサイル」(missiles théoriques)と形容したことは、フランスの地においても「子どもの家―実験室」の取り組みが、単なる歴史的遺物ではなく、当時の体制批判のあり方に呼応し得る実際的な参照項とみなされていたことを示しているよう。

人間の解放を大義に掲げた社会主義社会で、皮肉にも政治的抑圧の憂き目にあった「子どもの家―実験室」の試みは、このように、六八年運動のただ中で篤い再評価を受けた。後者の文脈において「子どもの家―実験室」の実践は、スターリン主義的統制体制のみならず、同体制を批判的的としてきた西側の資本主義的管理社会そのものにも対抗するための、教育学的オルタナティブだったのである。とすれば、一九二〇年代前半のソ連で行われた活動に対する見直しは、人間社会の「真の」解放を志向してい

た六八年運動者らによる、スターリン主義に歪曲されていない評議会<sup>ソビエト</sup>が有し得た「自主管理」の可能性への回帰であったのかもしれない。

(京都大学文学研究科スラブ語学スラブ文学専修)

- (1) 具体的には、モスクワのマラーヤ・ニキーツカヤ通り六番地にあるリャブシンスキー邸の二階にて、活動が行われていた。その一階には、ロシア精神分析協会の事務所が置かれていた。付言しておくならば、この邸宅は、一九二五年に「子どもの家―実験室」(以下、訳者による注釈において「実験室」と記す)が閉鎖された後、マキシム・ゴリキーが、一九三一、二年から一九三六年の死にいたるまでの間、住むところとなった。現在、当該の場所は、彼の家―博物館となっている。
- (2) 実際、この一九二一年から二〇年代中盤にかけて、ソビエトの国家財政は、革命に引き続く諸戦争による経済的崩壊や、一九二一年夏にウクライナや北コーカサス地域を襲った大干魃に起因する飢饉といった問題によって、深刻な危機に瀕しており、教育の無償化を理念として掲げていた当局も、一九二一年には国民教育費を地方予算へと移し、一九二三年には授業料の徴収を容認せざるを得なくなったほどには、その深刻さは憂慮すべきものだった。
- (3) N教授とは、アレクサンドル・ペトロヴィチ・ネチャエフ(一八七〇―一九四八)を指していると考えられている。この精神神経学研究所の所長の前任者は、アレクサンドル・ニコラエヴィッチ・ベルンシュテイン(一八七〇―一九三二)という人物であったが、彼は、実験室が開設される際、その申請書の提出先である国家機関(具体的には、教育人民委員部の学術部門)の副官でもあった。ザビーネ・リッヒエベツヒャーは、彼のかかる立場が功を奏して、当施設の開設の手続きが円滑に運び得た可能性を指摘している。リッヒエベツヒャー、ザビーネ(田中ひかる訳)『ザビーナ・シュピールラインの悲劇―ユングとフロイト、スターリンとヒトラーのはざま』岩波書店、二〇〇九年、二九四頁。
- (4) まずモスクワ精神神経学研究所は、自らの補助機関から実験室を分離する旨の決議を、一九三二年二月二四日付で教育人民委員部に提出した。しかし、次段落でシュミットも述べているように、実験室は、一九三二年の三、四月、教育人民委員部の計らいとコミンテルンの介入によって、ロシアとドイツの鉱山労働者団体から継続的な支援を獲得するに至った。また、このとき教育人民委員部は、実験室を再びモスクワ精神神経学研究所の補助機関として据え直す旨を宣言したのだが、モスクワ精

- 神神経学研究所がこれに対する異議を一九二二年五月一七日付で提出し、両者の協力関係は絶たれることとなった。ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации), д. 4575, оп. 1, д. 220, л. 1. (Оваченко В.И., Лейбин В.М. Антология российского психоанализа. Т. 2. М., 1996. С. 626.) ГАРФ, ф. 2307, оп. 2, д. 200, л. 85. (Там же. С. 629.) ГАРФ, ф. 2307, оп. 2, д. 200, л. 90-90. (Там же. С. 631.)
- (5) 一九二三年四月二六日、科学分野の国家政策を策定する、教育人民委員部の構成機関である ГПС<sup>ス</sup>の科学・教育部門幹部会にて、実験室の存続についての審議会が行われたが、本幹部会の評価は、実験室の運営に必要な費用が不経済であることと、その活動が ГПСの直面している課題にとって無益であることを非難する、極めて否定的なものであった。しかし、ГПСの主要人物でありながら、なおかつロシア精神分析協会<sup>ス</sup>の教育部門を率いる教育学者でもあった、参加者スタニスラフ・シャツキーは、この決議に対して、実験室の活動が有する教育学的意義を主張することで対抗し、会議参加者の諸意見を否定的なものとする肯定的なものに二分させた。こうして、当会議の最終的な結論は、宙づりとなった。ГАРФ, ф. 298, оп. 2, д. 251, л. 21. (Там же. С. 645.) Эткинда А. Эрос невозможно: История психоанализа в России. М., 1994. С. 196-197.
- (6) 前注(5)にて示した会議の後、当該の問題は、教育人民委員部の評議会へ引き渡されることとなり、一九二三年五月一六日、教育人民委員部幹部会は、業務改善のために新たな調査委員会を設けるという条件つきで、試験的に一年の間、当実験室を存続させる決議を下した。調査委員会は、オットー・ベム、オットー・シュミット(当資料の著者、ヴェラ・シュミットの配偶者である)、パーヴェル・ブロンスキー、コンスタンティン・コルニロフ、イヴァン・グリヴェンコの五名によって構成されていたが、このうち、シュミット、ブロンスキー、グリヴェンコはロシア精神分析協会の会員であった。Там же. С. 198.
- (7) 前注(6)にて示した調査委員会の会議が、一九二三年九月一七日に開かれたが、当会議の見解は、実験室の教育学的価値を高く評価する極めて肯定的なものであり、これによって実験室は、その社会的立場をかううじて安定させ得た——アレクサンドル・エトキントは、この会議において、ちょうどこの時分にイワン・パブロフに対し、彼の反射学説と精神分析とが矛盾なく相容れる可能性を主張する書簡を書き送った、政府高官レフ・トロツキーが介入していた可能性を指摘している。しかし、実験室における職員同士の不和や、精神分析に対する世間的評価の悪化といった問題が重なって、一九二五年、実験室は解体に至った。Там же. С. 198-205.
- (8) (原注)「子どもの家——実験室」での諸観察によると、子どもたちの共同体は、一歳から一歳半の場合は四名、二歳の場合は五名、三歳の場合は六名の園児で構成されるべきである。
- (9) (原注)私たちは、「子どもの家——実験室」の実践において、このような事例をいくつか観察することができた。その女性養育者は小規模な自己分析をなし遂げた後に、彼女にとって現在これほどまでに魅力的に思われる子どもが、かつては憎ましい存

在でもあり得たということが、もはや理解できなくなったのである。

- (10) (原注)「子どもの家―実験室」において私たちは、このことに関して、次のことを確信している——すなわち、子どもたちの不機嫌とは、女性養育者たちの、無意識的な諸過程によって引き起こされた、教育的に誤った振る舞いに対する反応でしかない。私たちは、女性養育者が、子どもに対する自らの態度を分析し、それを意識化した後すぐさま、長く続いていた子どもの不機嫌が変化した多くの事例を知っている。

- (11) (原注)皮膚性愛と関連しているのは、私たちの施設のある女の子が、全身に自らの糞便を塗りつけようとする傾向である。彼女は、皆がまだ眠っている早朝に、それを行うのが常であった。その後日中において、彼女は、明らかに高揚した気分であり続け、目には喜びに満ちた輝きを宿していた。私たちは、そのことで彼女を叱りつけることはなく、ただ彼女をきれいに洗い、下着を取り替えてあげた。そして、彼女の行動を、所謂自然な方法で防止するために、適切な時間に彼女をおまるへ座らせるよう、努めただけであった。さて、二歳半のとき、彼女は、自分が自由に使うことのできる絵の具を手に入れた。彼女は、はじめのうちは、もっぱらそれらの絵の具を指で紙に塗りつけているだけであったが、やがて、当該の目的のために筆を使うことを覚えた。こうして、彼女が鋭い色彩感覚を持ち合わせていたこと、そして、大いに楽しみ、かつ理解しながら色を選び出してそれらを組み合わせていたことが、明らかにになったのである。彼女の絵は常に無対象(*gegenstandslos*)であり、巧みに配された色の斑点のみから構成されていたが、これらの色斑はまさしく芸術的な印象を与えるものであった。この活動は、時とともに、彼女にとって非常に魅力的なものとなったため、彼女は以前の喜びを何の困難もなく放棄した。すなわち、以前の喜びは、本質的には同類でありながらも、文化のおよび社会的にはより高次にある新たな喜びによって、置き換えられたのである。

- (12) (原注)子どもたちは、女性養育者のうちの一人をそのように呼んでいる。

- (13) 『ソビエト・ロシアにおける精神分析的教育』は、二〇一一年にロシア語に翻訳されており、そこに当該の序文が掲載されている。訳者(もしくは、編集者)によれば、これは、一九二〇年代当時に予定されていた(が実現することなかった)ロシア語版出版のために、ヴェラ・シュミット本人が書いたものであり、手稿のかたちで保存されていた。

- (14) 変更を加えられたロシア語の文章は、未だ見つかっていない。
- (15) 『精神分析・精神病理学研究年報』の創刊は、一九〇九年、『精神分析中央誌』の創刊は、一九一〇年八月である。

- (16) Junggren, Magnus, *Poetry and Psychiatry: Essays on early twentieth-century Russian symbolist culture* (Boston: Academic Studies Press, 2014), p. 90.

- (17) シャン・マルティは、革命前ロシアにおける精神分析の受容度が、西洋諸国よりもはるかに高かったことを指摘している。

マルティの整理によれば、まずベルリンでは、一九一四年の時点では精神分析の教育や実践に開かれた公的機関が皆無であり、分析理論が臨床精神医学に徐々に浸透しつつあるとフロイト自身が満足をもって確認できたのは、一九二三年になってからだった、とされている。次にフランスでは、特に文献翻訳が遅々としていた、とされている——マルティによれば、ロシアにおいては一九一一年にはすでに全編が翻訳されていた『精神分析について』の初のフランス語訳がスイスの雑誌において掲載されたのは、一九二〇年代末であった。そして、精神分析運動の中心地ウィーンやチューリッヒでさえ、同時期に活動していた精神分析家グループの構成員は、両手で数えられる程度にすぎなかった、とされている。Marti, Jean, “La psychanalyse en Russie et en Union soviétique de 1919 à 1930,” *Critique* 32, no. 346 (1976), pp. 199-204.

(18) 一九三三年九月一〇月あたり、カザン協会の主要会員の多くが、モスクワ協会へと移ったことで、両協会はロシア精神分析協会として、事実上統合されることとなった。

(19) 具体的には、モスクワ精神分析協会の定款が、IPVの中央執行部に提出されておらず、これは当時のIPVにおける第十二番目の規約に違反した。ところが、先行研究「マルティン・ミラー、エリザベート・ルディネスコ、アレクサンドル・エトキンら」においては、モスクワ協会のIPV加入が見送られたくだんの出来事は単に、正式な定款が提出されていないという「形式上の理由」から生じたのではなく、実際は、イデオロギー的な問題やモスクワ協会会員の非医師率の高さといった問題に対する懸念から生じたものと解釈されている。なお、露協会の会員名簿については、國分によって整理された詳細なリストが参考になる。

Ferenczi, Sandor, von Freund, Anton, Freud, Sigmund, “Korrespondenzblatt der Internationalen Psychoanalytischen Vereinigung,” *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse* 5 (1919), S. 144; Miller, Martin Alan, *Freud and the Bolsheviks: Psychoanalysis in Imperial Russia and the Soviet Union* (the United States of America: Yale University, 1998), p. 61; Roudinesco, Élisabeth, *Histoire de la psychanalyse en France*, vol. 2 (France: POINTS, 2023), p. 82-83; Эткинда А. Эрос невозможного: История психоанализа в России. М., 1994. С. 189-190; 國分充、牛山道雄「初期ソビエト精神分析運動史——Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse 誌の記事から」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』五八巻、二〇〇七年、二八〇—二八一頁。

(20) すべて挙げられているのがモスクワ精神分析協会ではなく、ロシア精神分析協会である理由については、注(18)を参照されたい。

(21) Abraham, Karl, “Bulletin of the International Psycho-Analytical Association,” *The International Journal of Psycho-Analysis* 5, part. 1 (1924), p. 122.

(22) 革命「内戦」ネップを経た不安定な時代においてこそ、真面目で信頼ある理論が必要であるという理由から、一九二三年より創刊された『最高權威の党理論誌』『マルクス主義の旗のもとに』の理念は、レーニンのそれ——すなわち、唯物論を「あら

ゆる観念論的潮流、有神論的思想への抗戦が可能であるという意味で戦闘的なものにするためには、自然科学者自身が弁証法的唯物論者となり、自然科学における諸問題の解を、唯物論的に解釈されたヘーゲルの弁証法のなかに見出すようにならねばならない、というものであり、これを受けて、一九二三年九月四日のカザン精神分析協会での会議においてはじめて、マルクス主義と精神分析の関係についての問題が議論された。これを皮切りに、両者は調和的であるのか否かをめぐる論争、所謂「フロイト・マルクス主義論争」が活発化することとなる。論争の行く末は、本解題第三節を参照されたい。

- (23) 資料において、ヴェーラ・シュミットが、「教育とは、快原理の克服と現実原理によるその代替を促すものである」というフロイトの命題を「子どもの家―実験室」の基本的課題として据える一方で、これを達成するための措置として、明らかにソビエト的な「共同体生活の意義」を強調しているのは、この両義性の最たる例である。

- (24) 金山浩司『神なき国の科学思想―ソヴィエト連邦における物理学哲学論争』東海大学出版部、二〇一八年、佐々木力『マルクス主義科学論』みすず書房、一九九七年。

- (25) Леборин А. Фрейдизм и социология // Воинствующий материализм. 1925. No. 4. С. 3-39.

- (26) トロツキーが精神分析に対する自らの所見を述べている文献として、『文学と革命』『日常生活の諸問題』『わが生涯』を挙げるべきである。

- (27) 『国際精神分析雑誌』(Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse) には、各国の精神分析運動の状況を共有することができる項目があり、この欄にモスクワ協会やカザン協会、ロシア協会もまた、自協会の活動報告を掲載していたのであるが、露協会についての情報は、一九三〇年三月二七日に行われた講演についての記事を限りに、見られなくなる。ソ連精神分析運動に関わった人物に関する長大なリストや、その人物らの諸論文および政府資料のアンソロジーを編集したヴィクトル・オヴチャレンコによれば、露協会は、一九三〇年七月二七日に解体された。また、運動最後のフロイトの著作の翻訳とみなされているのは、イエハルマコフによって訳出された『ある錯覚の未来』である。Овраченко В. И. Российские психоаналитики (кратчайшая электронная версия). М., 2000. С. 208; Schmidt, Wera, "Russian Psycho-Analytical Society," *BULLETIN of the International Psycho-Analytical Association* 11 (1930), p. 521.

- (28) Van Munsteren, Lizaveta, *The Vicissitudes of Psychoanalysis in Soviet Russia, 1930-1980* (Milton Park: Routledge, 2025).

- (29) 西ドイツにおけるキンダーゲルン運動の全体像について、以下の論文を参照されたい。また川崎によれば、同地においてメンツェットの諸論考は、海賊版で流通していた。von Werder, Lutz, "Psychoanalyse und Kinderladenbewegung. Ein Blick auf vier Projekte," *Luzifer-Amour* 27, no. 54 (2014), S. 56-82; 川崎聡史「西ドイツにおける自主管理型保育施設「キンダーラーデン」——68年運動後の新しい幼児教育の思想と実践に関する考察」『ヨーロッパ研究』二二巻「二〇二二年」三二—四二頁。

(30) ライヒは、ムーネーのみならず、西ドイツの運動全体において最も影響力のあった思想家のうちの一人であった。ルッツ・フォン・ヴェルダーによれば、フランクフルトにおけるキンダーラーデン運動を主導したモニカ・ザイフェルトは、ライヒの著『性格分析——研究し実践する分析家のための技法と基礎』(Charakteranalyse: Technik und Grundlagen für studierende und praktizierende Analytiker)の私家版を作成し、一九六七年以降は、ライヒのその他の著作の海賊版を頒布することに努めていた。Ebd., S. 61; 水戸部由枝「My Revolution——六十〜七十年代の西ドイツ社会国家に見る「性の解放」」『デシヒテ』第五号、二〇一二年、九頁。

(31) この著作の所謂初版は、一九三〇年刊行の『性的成熟、禁欲、婚姻道德——ブルジョア的性改革批判』(Geschlechtsreife, Enthaltsamkeit, Ehemoral: Eine Kritik der bürgerlichen Sexualreform)であるが、一九二〇年後半、スターリンの台頭に伴ってソビエトの性政策が反動化するのを目の当たりにしたライヒは、一九三六年、この状況に対する批判として第二版『文化闘争におけるセクシュアリティ』を公刊した。この版では、初版を第一部としたうえで、これに、初期ソビエトにおける革命的な性政策の試み(父権的支配の廃止や女性の自己決定権の確立の宣言、離婚や中絶の容易化、同性愛を処罰する法律の撤廃、そして集産主義的教育の実践等々)とその不成功を分析したセクションが、第二部として加えられた。とはいえこの時点では、ライヒはなおも社会主義革命による社会的解放に一縷の望みを託していたが、革命によって成立したはずのソビエト体制下で性政治的な反動が常態化しゆく状況を受け、人間の不自由さは、経済体制そのものよりも、性的抑圧を通じた性格構造の歪みに起因すると考えるようになる。そこで、亡命先のアメリカでの英文化を機に、第二版における用語や概念的枠組みを大きく改訂したものが、一九四五年刊行の第三版『セクシュアル・レポリーション』であった(ライヒによれば、本質的な研究素材や主張に変更はなかった)。以上のライヒの思想の変遷については、第二版、第三版に付された著者自序をも参照されたい。ライヒ、ヴィルヘルム(中尾ハジメ訳『性と文化の革命』第六版、勁草書房、一九七一年(原作発表一九四五年)、ix-xxv頁。

(32) これについてライヒは、次のような例を用いつつ、わかりよく説明している——『経済的な理由で、この階級(上層階級)は自然な欲求を抑制して利益をえたが、こういう自然の欲求は、もともと、社会生活を混乱させることは絶対になかった。道德による規律が存在理由をえたのは、それが生み出したものが実際に社会生活を危険にさらし始めたときだ。たとえば、飢えを自然に満足させようとするのを抑制すると、ぬすみをおこさせることになる。そしてこんどは、ぬすみを道德によってとがめなくてはならなくなる』(傍点原文、亀甲括弧内引用者。同上、二四頁。

(33) これらの雑誌の出版とはほとんど同じ頃合いに、資料の仏語訳の謄写版が、簡易な冊子形式で流通していた。また、コンスタンチン・シネルニコフによる訳が、二〇〇四年に公刊されている。Schmidt, Vera (trad. Bertaud, Ginette et Brohm Jean-Marie), "Education psychanalytique en Russie soviétique," *parisans*, no. 46 (1969), p. 58-71; Schmidt, Vera (trad. Matagne,

Jean-Marie), “Éducation psychanalytique en Russie soviétique,” *Les Temps Modernes*, no. 273 (1969), p. 1626-1647; Schmidt, Vera (trad. Sinelnikoff, Constantin), “Éducation psychanalytique en Russie soviétique,” *Slavica Occidentica*, no. 18 (2004), p. 315-334.

<sup>(34)</sup> Schmidt, Vera (trad. Matagne, Jean-Marie), “Éducation psychanalytique en Russie soviétique,” p. 1626.

<sup>(35)</sup> Brohm, Jean-Marie, “Présentation,” Brohm, Jean-Marie, ed., *Pulsions sexuelles et éducation du corps* (Paris: Union Générale d'Éditions, 1979), p. 44.